

令和7年度
第三回おおた地球さんご賞
作品集



画：石蔵 邦彦（アート美原）

文章は人である

Le style est l'homme meme

— アカデミー・フランセーズ —

文は人なり

自分の考えを文章に書くと、色んなことがあいまいなままであることに気づく。正しく見ているか、正しく考えているか。深く見ているか、深く考えているか。そういう力を日頃から身につけている人が、いい文章を書ける。

— 安部 龍太郎 —

地球さんご賞の趣旨

生命の源である「水」を主題に、「生命」「環境」の大切さを理解し、自助、共助の精神で行動できるこどもの育成を目指して、創設する事業です。同時に大人たちがこの活動を通じて子どもたちと交流し、地域と地域のために何ができるかを発見する場にしたいと願っています。

地球さんご賞の理念

【1】子どもたちに水や環境についての作文を書いてもらうことで、環境問題への意識を高め、将来の「環境保護活動」につながるきっかけを作りたい。

【2】全国の水のもり文化プロジェクトに共感いただく団体と共に作品の募集、選考、表彰を行い、大人たちが子どもたちと活動を共にすることで、地域社会における「子育て支援運動」へと発展させていきたい。

【3】活動を通じて、地域の意識を高め、子どもたちに郷土の自然や歴史を学ぼうという意識を持たせることで、地方分権を担う「人材」を育成したい。

【4】高齢者が水のもり文化プロジェクトに参加することで、学び直しや社会参加、生きがい作りのきっかけとなり、「地域の活性化」につなげていきたい。

【5】環境問題、子育て支援、社会教育などに携わる他の団体にも協力をお願いし、作品の応募や選考、表彰を行うことで、共同で「社会問題に取り組む体制」を作って行きたい。

「おおた地球さんご賞」は、大田区の小・中学生を主な対象とした作文・エッセイコンクールであり、入賞作品は、「地球さんご（3×5）賞」の全国（本部）表彰に推薦されます。

※「地球さんご（3×5）賞」は、人が持つ（見る、考える、行動する）という3つの力で、地球が直面する5つの課題（地球温暖化、海洋汚染、水質汚染、大気汚染、森林破壊）に立ち向かうことを目指して創設されており、大田区在住の直木賞作家である安部龍太郎氏が審査委員長を務めています。

安部龍太郎さんからのメッセージ

「子どもや孫たちの幸せのために」

地球さんご賞の活動について、各地の実行委員会の皆様には日ごろから大変お世話になっております。お蔭さまで今年度から佐賀県みやき町、大分県日田市、沖縄県宮古島市に参加していただきました。全国9カ所での活動となり、合計4,801人の子どもたちが応募してくれました。

これも皆様のご尽力の賜物と、厚く御礼申し上げます。

地球さんご賞は子どもたちが持っている、見る、考える、行動する力で、人類が直面している5つの環境問題（大気汚染、海洋汚染、水質汚染、森林破壊、地球温暖化）に立ち向かえるようになることをめざしています。さんごの名はこのことを示す〈3×5〉と、海の環境指標である珊瑚を組み合わせたものです。

世界はもの凄い早さでIT化やAI化に移行しています。子どもたちもそれに対応するための教育を受けていると思いますが、これだけでは充分ではありません。物事に対する判断力や実行力をやしなうためには、自分の考えを整理して文章にする経験がきわめて重要です。

そこで子どもたちに身近な水を中心として、環境問題についての作文や詩などを書いてもらい、地域に住む大人たちが誉めようというのが地球さんご賞の趣旨です。褒められた経験は子どもたちにとって誇らしい思い出となり、次のやる気につながるでしょうし、環境問題についての認識を深めるきっかけになると確信しています。

各地から寄せられた全国表彰の候補作を拝見すると、子どもたちは十分に期待に応えてくれているという手応えを感じます。文章がしっかりしているし、環境問題へのアプローチの仕方も千差万別で、中には小・中学生とは思えない詳細な観察をした作品や、自分で実験のやり方を工夫して実態を解明した作品もありました。

そして何より嬉しいのは、この活動が地域社会の大人と子ども、あるいは大人同士が触れ合う場になりつつあることです。特に福岡県八女市では前身のざぶん賞以来19年目の活動となり、初期に参加した子どもたちの中にはお父さんお母さんになった方も数多くいます。

皆さん、我々の力は小さなものですが、子どもや孫たちの幸せとお互いの人生の充実のために、共に歩み続けようではありませんか。

安部 龍太郎

『おおた地球さんご賞』と『おおた教育ビジョン』

受賞された皆様、誠におめでとうございます。

令和5年度から始まり、第3回を迎えた「おおた地球さんご賞」では、小学生115作品、中学生332作品、合計447作品のご応募をいただきました。昨今の異常ともいえる気象を危惧しての考察と行動を述べた作品や、身近な自然環境を自ら守ろうとする姿勢を著した作品など、ご自身が実際に体験されたことや調査・研究の結果を、独自の視点で表しており、大変楽しく読ませていただきました。

大田区教育委員会は、2年目となる『おおた教育ビジョン』に基づき様々な施策を進めております。ビジョンがめざすこども像の1つに「意欲をもって自ら学び、考え、主体的に行動するこども」を掲げております。

この「おおた地球さんご賞」が、地球環境や身近な自然環境を題材とした、未来を見据えた作品を生み出すコンクールであり、これからの大田区を創っていく人材育成に寄与する事業であると考えます。

今後とも、地域の皆様、企業、団体等の皆様のご支援・ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

大田区教育長 小黒 仁史

※ この作品集の挿絵は、大田区生産活動支援施設連絡会（おおむすび連絡会）と大田区社会教育関係団体の皆様にご協力いただきました。



画：松原 秀章（昭和 糺谷の歴史・文化の会）

<<< 目 次 >>>

賞名	作品名	お名前	学校名・学年	頁
大田区長賞【小学生の部】	二酸化炭素が減るところを目で見たい ～きりたんぼ鍋絶滅の危機！？～	田中 航平	矢口小学校 6年	5
大田区長賞【中学生の部】	意外な紙と海洋汚染	青木 勇磨	御園中学校 2年	6
大田区教育長賞【小学生の部】	多摩川を守りたい	親富祖 碧	嶺町小学校 4年	7
大田区教育長賞【中学生の部】	癒しの時間と責任	伊藤 永莉	大森第六中学校 2年	8
おおた地球さんご賞大賞	地球観光	戸澤 千紘	雪谷中学校 2年	9
おおた地球さんご賞準大賞	人の手で作る里山の自ぜん	澤田 茅朋	馬込第二小学校 3年	10
〃	昆虫の王者が未来を救う可能性	中島 春汰	石川台中学校 3年	11
(公財)伊東奨学会賞	大切な多摩川	土生 航士朗	嶺町小学校 4年	12
(公財)大田区文化振興協会賞	微生物は世界を救う(かもしれない)	関口 晴仁	大森第六中学校 2年	13
荏原製作所賞	形を変えるプラスチック	藤井 杏樹	池上第二小学校 6年	14

奨励賞【小学生の部】

作品名	お名前	学校名・学年	頁
呑川の水	新堀 旭未	池上第二小学校 6年	15
ゴミのポイ捨てのえいきょうについて	坂本 紬	嶺町小学校 4年	16
二酸化炭素をへらすじゅつ	齋藤 結南	出雲小学校 4年	17

奨励賞【中学生の部】

作品名	お名前	学校名・学年	頁
釣り糸から見た海洋汚染	板橋 実穂	雪谷中学校 2年	18
黒湯を守りたい	大野 譲士	雪谷中学校 2年	19
ごみ分別から考える自然を守ること	P.N.かがみ	雪谷中学校 2年	20
地球を守るために、今、私達ができること	式町 凜太郎	雪谷中学校 2年	21
私ができることから始める理由	正田 萌々香	雪谷中学校 2年	22
僕の海	岩崎 有冴	大森第十中学校 2年	23
洗足流れと生物多様性	伊東 穂香	大森第六中学校 2年	24
エコ未来会議から始まる、 大田区の新しい物語	大島 玄吾	大森第六中学校 2年	25
ゴキブリから私たちが学べること	北村 葵唯	大森第六中学校 2年	26
寄生虫	鬮目 ふうり	大森第六中学校 2年	27
人感センサーによる エネルギー節約と星夜の復活	志村 とわ	大森第六中学校 2年	28
貝殻が教えてくれた大気汚染のこと	吉田 好那	大森第六中学校 2年	29
取り戻せ！日本の多摩川	植松 拓海	石川台中学校 1年	30
地球温暖化	沖 優衣奈	石川台中学校 1年	31
リサイクルをしている	伊藤 沙穂子	石川台中学校 3年	32
道端のビニール袋	中山 楓花	石川台中学校 3年	33
私が見た海	福山 蒼依	志茂田中学校 3年	34

大田区で入賞されたうちの 20 作品については、全国本部表彰に推薦をさせていただきました。令和 7 年度は全国 9 地区（福岡県八女市、岡山県高梁川周辺、静岡県静岡市、富山県富山市、宮崎県都城市、佐賀県みやき町、大分県日田市、沖縄県宮古島市、大田区）で、「地球さんご賞」作文コンクールが実施され、全国 4,801 作品の応募がありました。各地区での入賞作品が 10～30 作品ずつ寄せられ、本部での選考結果を経て、入賞作品が決定しました。大田区からも、下記の 4 つの作品が入賞しました。

令和 7 年度「地球さんご賞」全国本部 優秀賞 12 作品

安部龍太郎賞、川井郁子賞など、優秀賞として 12 作品が選ばれました。その中で、大田区から推薦した下記の作品が選ばれました。

◆荻原浩賞

学校名・学年：矢口小学校 6 年 氏名：田中 航平

作品名：二酸化炭素が減るところを目で見たい～きりたんぼ鍋絶滅の危機！？～

◆彩雲賞

学校名・学年：雪谷中学校 2 年 氏名：大野 譲士

作品名：黒湯を守りたい

令和 7 年度「地球さんご賞」全国本部 奨励賞

奨励賞は、全体で 18 作品が選ばれました。その中で、大田区から推薦した下記の作品が選ばれました。

◇奨励賞

学校名・学年：大森第六中学校 2 年 氏名：関口 晴仁

作品名：微生物は世界を救う（かもしれない）

◇奨励賞

学校名・学年：石川台中学校 3 年 氏名：中山 楓花

作品名：道端のビニール袋



地球さんご賞全国本部 HP はこちら

■大田区長賞（小学生の部）

■地球さんご賞本部荻原浩賞

二酸化炭素が減るところを目で見たい

（きりたんぼ鍋絶滅の危機!?!）

田中 航平

僕は、きりたんぼ鍋が大好きです。でも、今地球温暖化が進んでいる中で、冬があったかくなって、きりたんぼ鍋がおいしく食べられなくなってしまうと思います。そこで、地球温暖化を食い止めて、おいしくきりたんぼ鍋を食べ続けられるような地球にするにはどうしたらいいかを研究しました。

学校での自主学习で、地球温暖化の仕組みについて勉強しました。そして、二酸化炭素が地球温暖化を悪化させていることが分かりました。そのあと、理科の学習で、植物は二酸化炭素を吸って、酸素を空気中に出していることを知りました。でも僕は、それが本当なのか目で見てみたくなりました。そこで、夏休みの自由研究のテーマにすることにしました。インターネットで調べたら、コロナの時に二酸化炭素を測って、濃度が高いときに換気をうながすために使っていた機械を発見しました。それは、二酸化炭素濃度計です。これを使って夏休みの二十一日間実験を行いました。その方法は、①朝七時五十分に一リットルの水をヒマワリにやる。②八時にポリ袋の中に、ヒマワリと二酸化炭素濃度計を入れて密閉し、二酸化炭素濃度、温度、湿度、湿度を観察する。③正午に二酸化炭素濃度計の二酸化炭素濃度、温度、湿度を観察しました。結果は、朝八時の二酸化炭素の値よりも、正午のほうが二酸化炭素濃度の数値が減っていました。また、最初の二酸化炭素が多ければ、二酸化炭素は平均よりたくさん減っていました。ここで終わりかと思いきや、密閉した袋の中に謎の水滴がついていました。これを本で調べ

ると、蒸散と言い、蒸散は、ヒートアイランド現象を抑える効果が期待できることが分かりました。

この実験で、地球温暖化を食い止めるには、植物をたくさん植えたほうがいいと思いました。みんなは、二酸化炭素が減るところを目で見えていないから、植物が二酸化炭素を減らしているところを見れば、植物を植えて育てることの大切さを知ってくれると思います。

目標は、一家庭に一鉢植えて育てれば、もしかしたら夏もきりたんぼ鍋のことを思い出せるかもしれないです。今年の夏は、暑すぎて頭の中には、そうめんしかなかったです。寒い冬早く来てほしいなあ。



画：村田 雪江（彩美会）

■大田区長賞（中学生の部）

意外な紙と海洋汚染

青木 勇磨

私はランニングをしていて、その時に多摩川にかかっている橋をわたる。その橋を通るたびに、橋のゴミが気になる。階段に、橋の隅に、川沿いに。見えなければ良いと思っっているのだろうか。誰も気にしないと思っっているのだろうか。あるいは何も考えずに捨てたのか。何にせよ、捨てているのは人間である。そして、それらが海洋汚染などの環境問題につながっている。

落ちていたもので私が気になったのは、ティッシュのゴミだ。夏だからかもしれないが、どちらかというと制汗シートや、ウェットティッシュが多く見られた。ウェットティッシュや制汗シートについて調べてみると、意外なことに、その九十パーセントがポリエステルなどのプラスチックでできているそう。海洋汚染の原因で多いのはプラスチックのゴミで、紙はわずか〇・三パーセントである。亀がプラスチックのゴミを飲み込んで死んでしまうということをよく耳にする。だから、プラスチックが海洋汚染の主な原因なことは知っていた。一見紙に見える制汗シートやウェットティッシュは、海洋汚染に影響しないと思われるが、実は海洋汚染に大きく影響している。ヨーロッパではウェットティッシュが積もって川の形を変形させてしまった事例もあり、プラスチック入りのウェットティッシュを禁止にする法律の訴えをする運動もある。そのおかげで、最近では生分解性素材を使用した生分解性ウェットティッシュも作られている。また、そもそもプラスチックの含まれていないウェットティッシュもある。これから先どんな出回れば、環境の負荷を減らすことができる。生産者の方も、いろいろ工夫をしてくれてはい

るが、消費者としてもやれることはある。プラスチックと言って想像できるものも色々あるが、ウェットティッシュなどの意外なプラスチックを削減したり、そもそも素材がプラスチックではないものを使用したりして、環境への負荷を減らす必要がある。

私はこれから、この先も、ポイ捨ては絶対にしないことと、ウェットティッシュやレジ袋などのプラスチックを無駄に使わないことを意識して生活していきたい。そしてあの時、川のゴミを見逃した私もひどい人間だと思い、反省している。次はたくさん時間をかけて、これまでやらなかった分、大量のゴミを拾おうと思っっている。特に、ペットボトルやウェットティッシュなど、プラスチックのものには気をつけて、たくさんゴミを拾いたい。そうすることで、たくさん動物の命を救いたい。そして、地域の川を守る人の一員に私もなれるよう頑張りたい。



画：東本 京子（とちの実作業所）

■大田区教育長賞【小学生の部】

多摩川を守りたい

親富祖 碧

ぼくは多摩川活動が好きだ。多摩川には、いろいろな種類の魚がいる。こんなにもたくさん魚が生息しているのは多摩川の水がきれいだからだ。

でも、ぼくは昔の多摩川のえいぞうを見ておどろいた。昔は、今とちがって家庭から出た生活はい水をそのまま流していたから、多摩川にはあわが浮いていたり、川の底も見えないくらいよごれていたりした。えいぞうにうつる多摩川は、ぼくがいつも見ている多摩川とはまぎやくで、川の色は茶色くにごっていて、家庭から流れてきたごみやあわなどで水面がおおわれていた。しかも魚たちは、川に流されてきたごみなどをエサとかんちがいて食べてしまっていた。魚たちはだんだんと弱ってしまい、死んでしまう魚も多かった。ぼくは、このことを知った時とても悲しい気持ちになった。そして、どうして今は、こんなにも川がきれいなのだろうと不思議に思った。今、こんなにも川がきれいになった理由を調べてみると、水再生センターが設置されたことや一人一人が環境を守ろうと心がけて生活するようになったからだということが分かった。生活はい水などのよごれた水をきれいにするための施設や設備が整えられたことは大きなことだと思うけれど、一人一人が水をきれいにしよう意識するだけでこんなにも川の水をきれいにすることができるということが、ぼくはとてもうれしかった。

それからぼくは、生活はい水をそのまま流さないようにするなど、工夫して生活している。多摩川をきれいに保つために、ぼくの工夫が役に立つとうれしい。

ぼくはきれいな多摩川を保つために、ふだんの生活で、ごみの分別や生活はい水そのものをへらす工夫をしている。まず、ごみの分

別では、魚や肉のパックはよごれを落としてリサイクルしたり、種類ごとにごみ箱をおいて分けて入れるようにしたりしている。次に生活はい水をへらすためにしていることでは、油よごれのついた食器は、油をふき取ってからあらって、せんざいを使う量を少なくするようにしている。また、歯みがきをするときやお風呂のときなど、水の出しっぱなしをしないように心がけている。こういった毎日の工夫は、ぼくだけではなく、小学校一年生の弟もいっしょにやってくれているし、家族も協力してくれている。こういう川をきれいに保つ工夫に一人一人が取り組んでいけば、多摩川はもつときれいになっていくと思う。

今の多摩川は、川の底が見えるくらいきれいだ。たくさん魚たちも川で元気に生きている。でも、川がきれいなことが当たり前だとは思ってはいけない。これからも、多摩川でたくさん魚たちが生きていけるように川の環境を守りながら生活していきたい。



画：黒田 実（アート美原）

■大田区教育長賞【中学生の部】

癒しの時間と責任

伊藤 永莉

毎週末、私は父と釣りに行くのが何よりの楽しみだ。自分で釣った魚の味は格別で、川や海の自然の中にいると、心が穏やかになる。釣りは私にとって癒しと充実感をくれる大切な時間だ。

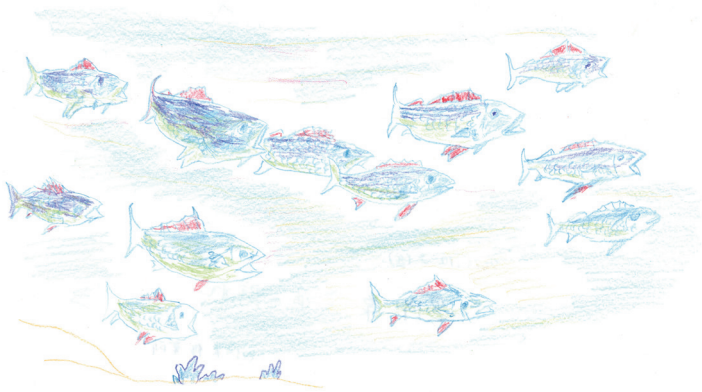
だが最近、そんな時間も不快なものに変わってしまった。釣り針や釣り糸、オモリなどの釣り具や餌の包装容器などが海洋や河川に投棄されているのをよく目にするようになったためである。そういったゴミのせいで、美しい景観が失われただけでなく、魚にも悪影響が及ぶのではないかと不安になった。

しかしこの間、同じことを思ったのか、父はゴミを拾い出した。私もモヤモヤして父と一緒にゴミを拾った。捨てた人はどんなことを考えていたのだろうか、もしかしたら無意識だったのかもしれない、そんなことを考えながら拾った。実際のところは分からないがゴミを捨ててしまう人は守るべき景色や自然環境のことを全く考えていないのかもしれない。もしそうなら、私はとても悲しいし、悔しい。自然は誰のものでもなく、私たちみんなのものであると気づいていないのだと思う。

あの日、父と一緒に拾ったゴミの袋は、思っていた以上に重かった。でもその重さは、自分たちの責任の重さのようにも感じられた。日本では一日に約六十八トンものゴミが海に捨てられているそう。年間では三万トンにも及ぶという。魚がゴミを飲み込み、食物連鎖によってそれが私たち人間にも影響しているというのはもはや有名な話だと思う。だからこそ何か効果的な対策が必要だ。例えば、大田区にある多摩川や呑川、東京湾などを調査し、グラフや写

真、地図などを通して住民に公開するのはどうだろうか。ごみ問題を「見える化」し、具体的な行動変化を促すといったものだ。私が今回調べるまで気がつかなかったように、身近にこんな深刻な問題が潜んでいると知らない人も多くいるはずだ。事実を可視化することで住民の意識向上にも繋がるのではないだろうか。

このように、地域の課題を明確にし、それを改善していくべきだ。また、そうすることでSDGs達成にも一歩近づくとと思う。これからは釣りに行くとき、魚を釣る楽しみだけでなく、自然を守る意識も一緒に持っていたい。そして、周囲にもその思いを積極的に伝えていけたらと思う。



画：宮内 泉（とちの実作業所）

■おれた地球さんご賞 大賞

地球観光

戸澤 千紘

この話は近い未来のことかもしれない。とある星の住人二人が、地球がこの宇宙にふさわしい星かどうか確認するために地球に来た。これはあくまで仕事だが、彼らは初めての地球に胸を躍らせていた。

「ついに地球についた！楽しむぞ！」

そうはしゃいで言ったのはさんご星人のA男。

「おいおい、はしゃぎすぎだ。」

同じくさんご星から来たB太がそう言った。彼も、楽しむなことが顔に出ていて隠しきれていない。

「あそこにご飯屋さんがある！行くよB太！」

「ちよ、ちよと待てよA男！」

A男のあとをB太が慌てて追いかける。

二人がたどり着いたのは、海辺にある飲食店。

「僕、これ食べてみたかったんだよねー」

「おいしそうだな。たしかそれは……」

「そう！地球の生き物、魚だよ！」

A男が頼んだのは焼き魚。二人はずっと前から、食べたいものリストに焼き魚を入れていた。A男は焼き魚にかぶりついた。

「おいし……ゴホッゴホッ！」

「A男！大丈夫か！」

A男はいきなりせきこみ、口から何か固い物が出てきた。

「これは一体……」

B太は、さんご星から支給された特別な機械を使って、A男の口から出てきたものを調べた。

「えっと……これはマイクロプラスチックという、五ミリ以下の小さなプラスチックごみのことらしい。人間が海に捨てたごみがマイク

ロプラスチックに分解され、それを魚が餌と間違えて飲みこんじゃったんだな。」

それを聞いてA男は絶望した。

「人間ってそんな簡単に自然を壊しちゃうんだね。自分たちの星を自分たちで傷つけるんだ。普通はそんなこと誰もしないはず。でも、人間はそれをする。おかしいよ。」

A男はそう言い、近くの海をながめた。彼らが見たかった、空のように青くきれいな海ではなく、大量のごみが浮かぶ濁った青色の海を。そしてここにいる誰もが、その光景を見て見ぬふりをしていく。

「このままだと地球は終わるね、B太。」

「そうだな。さんご星に帰ったら、このことを報告しよう。たぶん、宇宙のためにも地球は消すことになるかも。」

「じゃあ、もう帰ろう。」

二人は宇宙船に乗り、地球を去った。

地球は今、今回取り上げた海洋汚染の他に、大気汚染、森林破壊などの様々な環境問題がある。A男が言っていたように、私達人間は自分達の星を自分達で傷つけている。もしも、私がこの作文で書いた話が本当だったら、地球はもうすぐで消えてしまうだろう。そうならないためにも、今この瞬間から、地球にやさしい行動をとる必要がある。



画：内海 正（とちの実作業所）

■おおた地球さんご賞 準大賞

人の手で作る里山の自ぜん

澤田 茅朋

私は、一年生の時から大田区にある東京こう野鳥公園でボランティア活動をしています。元々生き物が好きで、とくにちようが好きでお客さんとしてよく遊びに行っていました。その時、公園のかんきようをととのえるボランティア活動があることを知り、さんかすることになりました。

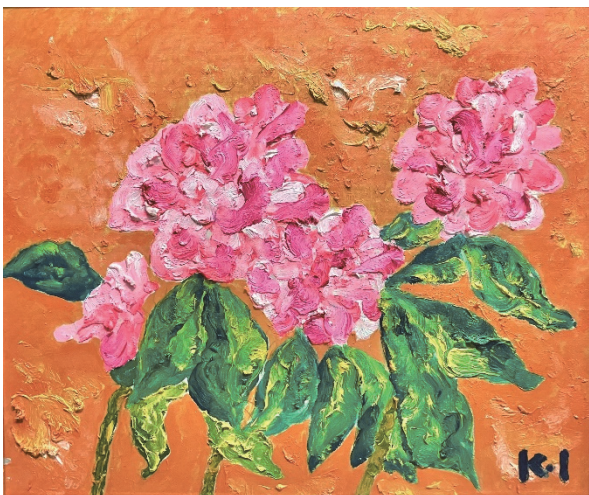
野鳥公園は、元々海だった所をうめ立てた島の上にあります。みなどを作り、大きな船が通れるようにするためにほったどろを集めてできた島です。その島が落ちつくまでの間に、草原や池などができ、魚やカニ、こん虫、野鳥などが集まるようになりました。わたりの鳥の中けい地点である事から、せん門家や都みんが協力して、都にはたらきかけて公園になりました。今では、公園が海だったとは思えないほど草や木がはえています。

公園は、半分がひがたや海、じよう緑じゆの多い林と池があります。もう半分は、田んぼや畑、ため池やぞう木林がある里山のせつ計で作られた自ぜん生たい園です。自ぜん生たい園には、たくさんしゆるいのトンボがいます。その理由は、色々な水べがあるからです。水面にたまごを生むトンボの中には、田んぼや池、水路など深さによって好みがあります。植物にたまごを生むトンボの中には、たまごを生む葉っぱのタイプに好みがあります。池の場所によって深さがちがって、生えている植物のタイプがちがっています。だから色々なしゆるいのトンボが住めるのです。

野鳥公園には、家の近くの公園では、あまりみられないちようもいます。その多くは、ぞう木林が好きで、木から出るじゆえきをの

んだり、幼虫が、ぞう木林の主な木（クヌギ、コナラ、エノキ）や、ぞう木林の下に生える下草を食べて育つちようです。また、カブトムシやハナムグリの仲間、タマムシなどのこう虫もいます。なぜなら公園では木のせん定で出たえだなどを、もやさずに公園内において土にもどすからです。土にもどるまでには、タマムシがたまごを生んで生まれた幼虫が食べ、くちた木をカブトムシやハナムグリの幼虫が食べたりするからです。

私は、草かりや、池のどろをほって出したり、ほうがこう新という作業を教えてもらいながらお手伝いをしています。里山は、日本人が生活にひつような食べ物やねんりようを作る中で、できた自ぜんの形です。手入れをしてり用する事で長く里山の自ぜんがつづいていました。そのかんきようをたよりにしてくらしている生き物が、たくさんいました。ぜつめつきぐしゆになつてくるちようの多くは、里山に住んでいたちようです。人のくらし方がかわつた事ですむ場所がなくなつた生き物に、もどつてくる場所を作りもどつてきてほしいです。生物多様性をつくるのは、「かんきようの多様性」をつくることだとみんなにも知つてもらいたいです。



画：石蔵 邦彦（アート美原）

■おおた地球さんご賞 準大賞

昆虫の王者が未来を救う可能性

中島 春汰

地球温暖化は今、世界中の大きな問題になっています。二酸化炭素などの温室効果ガスが増えて、気温がどんどん上がっています。異常気象が増え、南極の氷が溶け、海面が上昇。そんな未来を想像すると怖くなります。でも僕は最近、夢のような希望のニュースを見ました。

僕はカブトムシやクワガタが大好きです。去年飼っていたカブトムシが卵を産み、今年は二十匹のカブトムシが成虫になりました。一年間かけて飼育ケースの中で幼虫が育っていく様子を観察するのは本当にワクワクで、土を変えたり幼虫の大きさを確かめたりと一年中楽しめます。僕が見たニュースは、そんなカブトムシの幼虫が地球温暖化を救う力を持っているかもしれない、という内容でした。

幼虫は木の中の菌系や朽ち木を食べて成長します。人間が森やきのこの工場から出す「いらぬ菌系」や「腐った木」を燃やして処分すると、大量のCO₂が排出されてしまいます。でもその菌系をカブトムシの幼虫が食べてくれるのです。幼虫はそれを栄養に変え、土を豊かにし、CO₂発生を二十分の一に減らしてくれます。幼虫の方も菌系の加わった土を食べると通常より立派なカブトムシやクワガタに育つそうです。

さらに幼虫のフンは畑の肥料や魚のエサにも使えるそうです。今はたった一部の地域で実験的に行われているだけなのですが今後カブトムシのパワーにはまだまだ新しい発見がありそうな気がします。もっと大規模な範囲で実験が行われるようになるかもしれません。



画：森田 文子（アートクラブ）

ん。研究が進めばカブトムシは確実に温暖化を救う大切な存在になるはず。そう考えると、カブトムシだけにとどまらず、自然や小さな生き物にもっと希望を持てる気がします。

カブトムシの幼虫が菌系を食べ、自然や人間界をきれいにしてくれる未来。そんな未来を想像すると、温暖化のニュースで暗い気持ちになる僕たちに光を与えてくれるように感じます。僕たち人間は温暖化を止めるために努力し続けなければなりません。同時に自然の生き物の力も信じてみたいです。

僕はこれからも、自然や昆虫を大切にしていきたいと思っています。小さな昆虫が大きな問題を救うかもしれない。そんな未来を夢見ながら、僕も電気を無駄にしない、ごみを減らすなど、自分にできることを続けていきます。そして将来は僕もそんなカブトムシ達の活躍をそばでサポートできる仕事につきたいです。いつか、本当にカブトムシの幼虫が「地球を守る仲間」と誰にでも呼ばれる日が来たら、僕はずっと昔からそう信じていたと、言いたいです。

■公益財団法人伊東奨學會賞

大切な多摩川

土生 航士朗

「多摩川ってこんなにいいところなんだ。」と、ぼくはこの一年で何回も思った。そして、みんなにも多摩川の良さを伝えていきたいと思うようになった。

ぼくの通っている嶺町小学校には、多摩川活動という活動がある。一年生から毎年多摩川に入っていて、三年生では多摩川に入っ
て生き物をつかまえたり育てたりすることが出来る。ぼくは今年、
大きなテナガエビをつかまえた。友達と川に入ったときには、体長
二十cmくらいのカワアナゴもつかまえて、とてもうれしかった。ぼ
くは、この経験をして川も生き物のことも前よりもっと好きになっ
た。

けれど、ぼくはちよつと心ばいなことがある。それは地球と川の
関係だ。人が出す二酸化炭素のえいきようでこのまま地球の温だん
かが進むと、川や魚たちに大きなえいきようを与えると考えられて
いるからだ。地球温だんかが進むと異常気象が起きて水温が上がっ
てしまったり、生態系へのえいきようが出て水質が悪化したりして
しまう。そうすると生き物たちのすみかがなくなり、生きることが
むずかしくなる。だから今、ぼくたちはこれ以上地球温だんかが進
まないように工夫して川と生き物を守っていかねければならないと
思う。

川や生き物たちを守るための方法を調べてみると身近ですぐにで
きるものがいっぱいあった。まずは、ごみの分別だ。可燃、不燃、
そなど種類ごとに分けてごみを出す。それだけでも燃やすごみの
量がへり、二酸化炭素をへらすことができる。次に、最近よく聞く

3R。3Rとは、リデュース（削減）・リユース（再利用）・リサイ
クル（再資源）のことだ。ぼくもこの3Rに取り組んでいる。例え
ば、ごみの発生をおさえるために買い物袋を買わないようにしてい
る。レジ袋一まい使わないようにするだけで約10gのごみの量をへ
らすことができるそうだ。日本のエコバック使用率は約80%まで
上がってきているから、ぼくも家族と続けていきたいと思う。

そのほかにも大田区では、多摩川河川敷清掃活動などで河川敷の
ごみ拾いをし、川の環境を守っている。ぼくは、こういうイベン
トがあるを知り、いいチャンスだと思った。こういう活動に参加す
る人が増えれば、河川敷のごみがへり、川に流れてしまうごみも少
くなるからきれいな川を保つことができる。それに、実際に川を見
て川とふれ合うことで、多摩川のよさを知ってもらうきっかけにも
なると思う。ぼくが多摩川活動をして川を好きになったように、多
摩川を大切に思う人がふえてくれたらうれしい。ぼくは今までこう
いう活動があると知らなかつ
たけど、これからは家族や友
達と参加して、川の環境を守
るために協力していきたい。
そして、この川で生きている
生き物のことをたくさんの人
に伝えていきたい。



画：日比野 艶華（彩美会）

■公益財団法人大田区文化振興協会賞

■地球さんご賞本部奨励賞

微生物は世界を救う（かもしれない）

関口 晴仁

僕は今六中で自然科学部の活動をしている。具体的には洗足池の微生物を顕微鏡を使って延々と探している。ちなみに洗足池の微生物多様性は現在はミジンコ類が生態系の頂点になっていて、夏あたりで周期的に藍藻類が頂点に立つ。ゾウリムシやツリガネムシなどといったミジンコ以外の微生物も少ないがいる。微生物多様性はそこそこに富むと言えよう。

少々話が逸れたが、その中で僕の心が躍る微生物がいくつかわかる。それらのうちの二つを紹介したいと思う。まずはアオミドロだ。藍藻類の一種で、極地から熱帯までの淡水に生息している。日本では気温が二十度前後になると田んぼに大量発生し、俗にいうアオコも作るので、決して好かれてはいない。都内でも蛍放流池に大量発生し、水質を悪くする（と考えられている）ので忌み嫌われている。だが僕はこのアオミドロは実は〇〇削減に大いに役立つのではないかと考えている。なぜならまずアオミドロは植物性プランクトンなので、もちろん葉緑素を持っている。そしてなによりその増殖スピードがすごい。僕が中一の頃蛍放流池でアオコが発生したことがあった。発見の四日前にあった部活ではアオコのアの字も見えなかったのにたった四日で池を埋め尽くしそうな量のアオコが発生していたのだ。そんなことを知ったらアオミドロでいろいろとやってみたくなる。アオコをすりつぶしても葉緑素は働くのか、アオミドロはどのくらいのスピードでどのくらい増殖できるのか、その他いろいろ。そして何より思ったのはアオコを増殖させて大量のアオコで光合成のできる家は作れないかと考えたのである。ただしこれはアオミドロのあまりの枯れやすさに打ち砕かれた。アオミドロを飼育するにはどうやら大きめのプールが必要なようだった。ただ、

そんな野望が実現できなくてもアオコ、もといアオミドロの増殖力ならば、〇〇削減、宇宙開発エトセトラができるのではなからうかと画策するのである。

もう一つはツノケイソウだ。これは珪藻類の一種でアオコは作らない。なぜこれに目

をつけたかと言うと、今の自然科学部一年のとある人が拾ってきたスポンジのような沢山の毛が絡まった物体だった。それを顕微鏡で覗いてみるとなんと一本一本の毛がツノケイソウでできていた。それを見てアオミドロの時に書いたように光合成のできる家が作れそうだと思ったわけである。そして毛のようなと聞いたら勿論光合成のできる服なんてのが考えつく。これはとても長いツノケイソウが必要だが、強度の問題はどうやら大丈夫なので家と比較すればだいぶ現実味がある。問題点は増殖力がそこまで強くないことだろうか。

一ミリにも満たない生物が地球を変えるかもと考えるととてもロマンがある。アオミドロやツノケイソウのような植物性プランクトンだけではなく動物性プランクトンの中にもヒドラやツリガネムシなど興味深い微生物が沢山いる。ぜひもつと詳しく調べていきたい。



画：富山 正美（大森東福祉園）

■荏原製作所賞

形を変えるプラスチック

藤井 杏樹

私は夏休みに、香川県にある祖父母の家に遊びに行った。祖父母は私を津田の松原海水浴場に連れていってくれた。

濃い緑の松林を抜けると、透き通った海と水平線が広がっていた。私はすごく興奮した。こんなにもきれいな海を見たのは初めてだったからだ。

帰り際に、大きなゴミ袋がまとめられている場所があることに気が付いた。私は、大きい袋にパンパンに入ったゴミが気になった。パッと見た感じ、ペットボトルや食べ物のパッケージと容器だった。「さつき砂浜を歩いたときは、あんなにきれいだっただのに」と私は驚いた。すると祖母が、海ごみ清掃活動が定期的に行われていることを教えてくれた。

海にどんなゴミが落ちているのか気になった私は、東京に帰ってから近くのふるさとの浜辺公園に行くことにした。

気温が高くなる前の早朝に、家族でゴミ袋を持って出かけた。主にお菓子の空のパッケージや花火の袋、ペットボトルなどが落ちていた。海のゴミはプラスチックが多かったので調べてみると、海洋ゴミの約六十五パーセントがプラスチックだということが分かった。そのプラスチックを小さな魚が食べ、小さな魚を食べる大きな魚がいる。しかし、プラスチックは消化出来ないのです、体内に残り続けてしまう。このことから、プラスチックは海の生態系をおびやかしていることが分かる。

これだけを聞くと、プラスチックを無くせばいいと思ったが、重要な役目を果たしていることにも気が付いた。例えば、私の身近な物だ

とシャーペンや消しゴム、タブレットだ。これらは、私が勉強する上でとても便利だと感じている。他にも、病院で使う注射器などのプラスチックは、清潔さを保つ為に必要だ。

そこで私は、プラスチック問題について、これから出来る事はないか考えた。

すぐに思い付いたのは、プラスチックを無駄使いしないこと。さらに、使った後は正しく分別して再利用することだ。

このリサイクル活動が私の小さな一歩だ。

大田区は二〇二五年四月から、プラスチック分別回収（ペットボトルは別）を始めた。分別と聞くと、「よく分からない」と思う人もいるかもしれないが、どんな物もよく見ると、リサイクルマークがついている。家にあつたヨーグルトは「カップはプラマーク」、「ふた・ラベルは紙マーク」という表示があつて、とても丁寧で分かりやすかった。

大田区で回収したプラスチックはガス化して、再び原料として利用するケミカルリサイクル手法を導入している。私はこういったリサイクル方法があることを初めて知った。同時に分別することの大切さも理解した。

これからも、私に出来る事を見つけて継続していく。そして広めていく。なぜなら、みんなが暮らす地球の海を守っていきたいから。



画：平林 優（志茂田福祉センター）

■奨励賞（小学生の部）

呑川の水

新堀 旭末

私は習い事や曾祖母の家に行くときに呑川の近くを通って行きま
す。春になると桜が咲いてとてもきれいです。また呑川を見てみる
と亀やカモなどの動物がたくさんいます。

しかし、呑川にはビニール袋や自転車などのゴミが落ちていた
り、魚が大量死していたりすることがあります。さらに雨が降った
あとは、川の色が茶色になり汚くなっていることもあります。

私は呑川をきれいにしたいです。そのために川が汚れる原因を調
べて、自分でもできることを考えてみようと思いました。

最初に呑川が汚い理由を調べてみました。呑川が汚い理由は主に
二つあります。

一つ目は生活排水などが原因でできるスカムです。スカムとは川
などの水面上に流れる泡や薄い膜状のもののことです。

二つ目は不法投棄による水質悪化です。不法投棄したゴミが腐敗
して水質を汚染することがあります。

次に川をきれいにするために自分でもできることを考えてみまし
た。

まず不法投棄のゴミの対策を考えてみました。不法投棄をする人
がいると不法投棄されたゴミは無くなりません。しかし不法投棄を
する人を減らすことは難しいのでゴミ拾いのボランティアに参加す
ることだったら簡単にできると考えました。調べてみると実際に呑
川の近くで場所を決めてゴミ拾いをするボランティアがあることが
分かりました。

次に生活排水を減らす対策を考えてみました。たとえばお米のと

ぎ汁はそのまま流すと水質汚染の原因になってしまいます。とぎ汁
は床掃除や洗顔などに使えます。他にも台所で出た調理くずなどの
生ゴミは水切りをして捨てたり、スカムの原因となる油は新聞紙な
どに吸わせて捨てたりすることができます。

生活排水やゴミは他にもたくさん使います。生活排水は工夫すればたくさ
んの使い道があります。たくさん使った道があるものを、そのまま
流してしまったり、不法投棄してしまったりするのはもったいない
と思います。そのため私は呑川のためにも、生活排水やゴミを再利
用できるようにしたいです。

■奨励賞（小学生の部）

ゴミのポイ捨てのえいきょうについて

坂本 紬

みなさんは、ゴミのポイ捨てが、どのようなえいきょうをあたえているかを知っていますか。実は、ポイ捨てをすると、みんながこまるだけでなくかんきょうにもいへんが起きてしまいます。今からポイ捨てがかんきょうにどのようなえいきょうがあるのか、どのようないへんがあるのかをいっしょに考えていきましょう。

ポイ捨てをするとその人の周りからは、ゴミがなくなつて整理がしやすくなると思います。ですが本当はルールいはずです。例えば海にゴミを捨てると、ウミガメや、魚たちがまちがって食べてしまうことがあります。生き物たちがふだん食べない物を食べて命をおとしてしまうこともあります。それ以外にもゴミのポイ捨ては、悪臭を引き起こしたりゴミが何かに当たって火災が起きたり、病気の原因になつたりします。プラスチックが劣化して、マイクロプラスチックとなり、私たちの健康にもいへんを起こすこともあります。

次に、ポイ捨てされるゴミの種類についても調べたのでしようかいます。ポイ捨ての中で一番多いものがタバコです。他にも、カンやペットボトル、ビニールぶくろ、紙くず、マスクなどが多いです。私が町を歩いていると、ペットボトルが落ちているのを見かけます。「ポイ捨ては、とてもめいわくだな。」と私はいつも思います。また、日本の四十七都道府県の中でゴミのポイ捨てをふせぐとりにくみをしている一位は、栃木県だそうです。ほかの都道府県もゴミのポイ捨てをふせぐとりにくみをしています。

このようなポイ捨てをふせぐためにはどうすればいいのでしょうか。それは、外に捨てないで自分のゴミは、ちゃんともちかえるこ

とです。そうすれば、ポイ捨てにはなりません。しつかり家にすべともちかえつて捨てるのが大切です。

このように、少しのゴミでも外に捨てるとポイ捨てになつてしまいます。ポイ捨てのルールいはずによつて大へんなことになつていきます。一人一人が心がけて守ることが大切です。みんなで良いかんきょうを作つていくために、ポイ捨てをしないようにしましょう。

■奨励賞（小学生の部）

二酸化炭素をへらすぎじゅつ

齋藤 結南

私は地球温だん化について調べようと思いました。なぜなら、だんだん気温が高くなって行って地球温だん化が様々な問題を引き起こしてしまうからです。例えば、海面全体の水位が上昇してしまうったり、いじょうきしようのために生態系や健康へのえいきようを引き起こしてしまったりするからです。

地球温だん化の原因は石灰、石油、天然ガスなどの化石ねん料をもやすことで二酸化炭素を増やしてしまったり、森林伐採により二酸化炭素を吸収する量がへってしまったりすることなどです。

私は初め、電気や水や物を大切に省エネをよびかけることしかできないと思っていました。でも、万博に行って二酸化炭素をへらす色々なぎじゅつが開発されていることを知りました。

例えば、私が入ったパビリオンでは、水と再生可能エネルギーから水素をつくって二酸化炭素と水素でeーメタンを作り、家庭や工場でeーメタンを使い、二酸化炭素を回収して再利用するぎじゅつがしようかいされています。他にも、電気だけで走るバスに乗りました。

私は人のぎじゅつで二酸化炭素がふえたなら、人のぎじゅつで二酸化炭素をへらして今よりも、私たちの生活が良くなるといいなと思いました。

■奨励賞（中学生の部）

釣り糸から見えた海洋汚染

板橋 実穂

夏休み、家族や友人と羽田沖へ釣りに出かけた。風に吹かれながら友人と話し、京浜工業地帯を眺めるのは、時間がゆっくり進んでいくようで、とても好きだった。しかし、ふと柵の下に目が留まった。そこには、潰れたラベルがついたままのペットボトルが落ちていた。まさかと思い、水面を見ると、ペットボトルのキャップや破けて小さくなったビニール袋が、意図があるはずもなく風に吹かれて水面をただ漂っていた。視界の奥に大きな船が通った。後から調べたところ、その船は、海洋ごみを回収するための船だった。海は汚れていた。私は、誰かがごみをポイ捨てしたのだろうと、少し怒りすら感じた。

そんなとき、私の持っていた釣り竿はずっしりと重くなった。必ず釣り上げると心のなかで意気込み、必死に竿を支えながら糸を巻いていった。しかし、突然竿が軽くなった。魚は逃げてしまったのだ。その上、魚に釣り糸も切れ、針と糸はそのまま海に沈んでいった。友人の釣り竿を見ると、針と糸だけではなく、プラスチック製のルアーや浮きがついていた。それも何らかの拍子に海へ落ちてしまうかもしれない。そしてそれらは海洋ごみになってしまう。自分も無意識のうちに海を汚してしまっていたのではないか。そう思ったとき、はっとした。

そのとき、夏休みの自由研究でマイクロプラスチックについて調べ、まとめたことが思い出された。海に入ってしまったプラスチックごみは時間をかけて波によって砕かれ、やがて小さめの金魚の餌ほどの大きさになる。それを魚やカメなどがエサと間違えて食べて

しまい、そのプラスチックを食べてしまった生き物を別の生き物が食べるなど、食物連鎖により、プラスチックが多くの生き物に渡っていく、生態系に影響を与えてしまうことがある。また、大きなごみが体からまって動けなくなってしまうたりすることもあるという。ごみの問題の深刻さを感じた。

これまで、ポイ捨て、洗剤や油の使い過ぎなどが海を汚す主な原因だと思っていた。しかし、今回釣りをして、それよりもっと身近なところに海を汚す原因があるということに強く感じた。自分たちが使う釣り道具や消耗品も、気づかぬうちに海洋ごみの一部になってしまいかもしれないのだ。

今回、深刻なごみ問題を海から学んだ。このことから将来、土や波に分解されやすい素材を使用した容器や、魚に噛み切られにくい糸など海のごみになりにくいものを開発したい。そして、次の世代の人々が海にごみは一つもないと言い切れるような海にしたいと思った。

■奨励賞（中学生の部）

■地球さんご賞本部彩雲賞

黒湯を守りたい

大野 護士

僕は、大田区の黒湯を守りたいと思っています。

黒湯は驚くほど真っ黒な色をしています。

黒さの正体は「フミン」という成分です。

フミンは、植物が長い年月をかけて土の中で分解される時に生まれる天然の有機物で、保湿や抗酸化の働きがあると知られています。

また、肌を柔らかく保ち、血行を促す作用もあって、昔から健康や美容に良いお湯として親しまれてきました。

実際に入浴すると肌は潤い、体の芯まで温まります。見た目に反してか、見た目通りなのか？とにかく自然の恵みが詰まった心地良いお湯なのです。

その心地良さは、疲れた心や体を優しくいやしてくれる力を持っています。

僕は小学生の頃、アトピー性皮膚炎を発症して皮膚科に通っていました。

沢山のぬり薬を出され、炎症を抑えてもまた繰り返されることに悩んでいました。

そんな時、お母さんが知り合いから黒湯の話を知ってきたので

「温泉で治るのかな？」と半信半疑でしたが、通い続けるうちに肌の調子が少しずつ良くなり、完治しました。

薬では得られなかった効果を、黒湯から実感することができたのです。また、サッカーで筋肉を使い過ぎた時にも疲労を回復するたぬめや、友達と楽しい時間を過ごすために行きます。

僕にとって黒湯はただのお風呂ではなく、健康や自信、友達との絆を深める大切な場所となっています。

大田区は羽田空港や工場が点在し、下町の住宅や暮らしが息づく街です。

その都市の中に残された『自然の宝物』のような黒湯は地下深くから湧き出ていて、人々に安らぎとやすしを与えています。

しかし銭湯の数は年々減っており、大田区でも黒湯を楽しめる銭湯が少なくなっていると聞きました。もし黒湯がなくなってしまうたら、僕のように助けられる人は減り、地域のつながりや歴史も失われ、街の魅力が消えてしまうこととなります。

自然が壊されて森や土が減ってしまうと、フミンを生み出す力も弱まり、黒湯の源が少なくなってしまうそうです。

だからこそ、僕は守りたいのです。フミンを含んだ黒湯の素晴らしさを体験すれば、その価値の大きさをきくと実感できます。

僕たちにもできることはたくさんあります。ゴミをポイ捨てしない、使った電気をこまめに消す、マイボトルを使うなどです。

小さな行動の積み重ねは自然を守ることに繋がります。僕たちの暮らしと心の豊かさを守ることに必要です。未来を生きる人々たちへの大切な贈り物として、貴重な恵みを残していきたいと心から思っています。



画：松原 秀章（昭和 糶谷の歴史・文化の会）

■奨励賞（中学生の部）

ごみ分別から考える自然を守ること

P.N.かがみ

大田区では、ごみを「燃えるごみ」と「プラスチックごみ」に分けて出すようになりました。実際に分別してみると想像以上にプラスチックごみが多く、驚きました。食品の容器やお菓子の袋、洗剤のボトルなど、日常で当たり前を使う物が、すぐに袋いっぱいになってしまふのです。これまで気にせず捨てていたものが、資源や環境に大きく影響していると知り、反省しました。

一方、ペットボトルは「資源ごみ」として回収され、リサイクルされることを学びました。新しい製品に生まれ変わる仕組みを知ると、ごみも工夫次第で資源になると実感できます。分別は自然や地球への負担を減らす第一歩なのだと思います。

私の家族はキャンプが好きで、自然の中で過ごす機会があります。しかし、分別されていないごみを見ると、とても残念な気持ちになります。自然に捨てられたごみは分解に時間がかかり、動物や植物に悪影響を与えるからです。逆に、自分たちのごみを正しく分別したり持ち帰ったりすると、自然を守ることに繋がっていると実感できます。キャンプでの体験は、環境への意識を高める大切なきっかけになると思います。

また、日常生活でも環境のためにできることを心がけています。まずは分別をしっかり行うことです。最初は面倒に感じましたが、家族と協力して習慣にできました。

次にできるだけペットボトルを買わないようにしています。水筒を持ち歩けばごみを減らせるので、自然を守る手助けになっていると感じます。さらに、買い物ではできるだけ袋をもらわないようにし

ています。小さな積み重ねが大きな効果につながると信じているからです。

ごみ分別やごみを減らす工夫、自然の中での体験を通して、自然を守ることは特別なことではなく、身近な生活から始められると学びました。

これからもキャンプや日常生活でできることを続け、環境について考え行動していきたいです。

■奨励賞（中学生の部）

地球を守るために、今、私達が出来ること

式町 凜太郎

今、世界各地で異常気象や環境破壊が進んでいる。夏にはヨーロッパで観測史上最高の気温を記録し、山火事が相次いだ。アジアの国々では豪雨による洪水が人々の生活を奪った。日本でも例外ではなく、集中豪雨や猛暑日が年々増え、私達の暮らしに直接影響を与えている。ニュースで「地球温暖化」という言葉を耳にする度、それは遠い世界の話ではなく、今まさに自分の住む場所に迫る現実だと感じる。

環境を守るために大切なのは、水や海、大気、森林といった自然の循環である。これらは単に資源ではなく、私達が生きていく上で欠かせない「生命の基盤」だ。しかし今、その基盤が急速に失われつつある。国連の報告によれば、世界の森林は毎年東京都の面積に匹敵するほど消失しているという。森林が減れば二酸化炭素を吸収する力が弱まり、気候変動がさらに加速する。地球全体が悪循環に陥る危険性を抱えているのだ。こうした問題を考えるとき、私は自分の住む東京都大田区を思い浮かべる。大田区は羽田空港を抱え、世界とつながる玄関口である一方、多摩川や東京湾に面した自然環境も残されている。最近では区が中心となって多摩川の清掃活動や水質調査を行い、地域の人々が協力して川を守る取り組みが続けられている。かつて汚染が問題となった多摩川は、今ではアユが戻るほど水質が改善しつつある。この変化は、地域の人々が少しずつ行動を積み重ねた結果であり、地球全体の未来につながる大切な努力だと思う。

一方で、東京湾ではプラスチックごみによる汚染が深刻化している。海外のニュースでは海ガメやクジラがごみを飲み込み命を落とす映像が流れていたが、それは遠い海の出来事ではない。実際に東京湾でも同じ問題が起きているのだ。便利さを優先し使い捨ての生活をしているのは、正に私達自身だからだ。問題の原因と責任が「自分の生活」とつながっていることを突きつけられた。

地球規模の問題は、一人ひとりの生活と密接に関わっている。だからこそ私達若い世代が、未来に向けてどう行動するかが問われているのだと思う。環境問題は、「今の大人だけが考えること」ではなく、これから生きる私達世代に直結する問題なのだ。例えば、ペットボトルをできるだけ使わずマイボトルを持ち歩くことや、エネルギーを無駄にしない生活を心がけること。小さなことでも続けることで、未来は確実に変わっていく。私は地球が「かけがえのない生命を育む場」であることを忘れてたくない。そしてその大切さを同じ地球に生きる仲間と共有していきたい。

多摩川の水のきらめきや、東京湾に吹く風を感じるとき、私はこの環境を未来に残したいと強く思う。地球の危機を伝えるニュースに心を痛めるだけでなく、今この場所のできる行動を選び取ることに。それが、私達中学生の責任であり、未来への約束だと信じている。

■奨励賞（中学生の部）

私ができることから始める理由

正田 萌々香

私の祖父母は沖縄県に暮らしています。毎年、夏休みには遊びに行くのが恒例です。ですが、今年は何んだか様子が違っていました。いつも見に行っているあの美しい珊瑚礁が、どこにも見当たらなかつたのです。祖父母に聞いてみると、地球温暖化による海水温の上昇が原因で、珊瑚が死んでしまったそうです。言われてみれば、ここ数年で少しずつ減ってきていたようにも思えて、何とも言えない気持ちになりました。

今、世界全体で地球温暖化が問題となつていますが、根本は排出された温室効果ガスが地球を覆い、熱を閉じ込めることで進行しています。製造や食料生産、電力の使用などが主な原因です。さらに、森林伐採によりCO₂の吸収能力も低下し、状況は悪化しています。こうした中、環境省は「政府実行計画」として、省エネ対策の強化と太陽光発電をはじめとする再生可能エネルギーの活用を、これまで以上に進めていく方針を発表しました。特に軽量で取り付けやすいペロブスカイト太陽電池を活用し、設置が難しかった建物の屋根や壁面への導入も進めるとしています。

私は沖縄での体験や実際に調べて、地球温暖化がただニュースや教科書の中の話ではなく、実際に身近に起きている現実だということとを強く実感しました。毎年、透き通るような海に広がっていたカラフルな珊瑚礁が見られなくなってしまうと思つたあの寂しさは、ずっと心に残っています。珊瑚は海の生き物たちの住処であり、それが失われるということは、そこで暮らす魚などの他の生物たちの

命も失われていくことにつながります。それがただの自然現象による破壊ではなく、人間の生活の影響によるものであると知った時、自分も加害者の一人だったんだという思いが湧いてきました。

最初は正直、どうしたらいいのか分かりませんでした。でも、だからこそ何もしないのではなく、できることから少しずつやってみるしかないと思います、たとえば学校で環境について話し合える時間を大切にしたり、ボランティアに参加したりするなど簡単にできることからやってみていいなと思います。自分一人では限界があつても、同じ気持ちの仲間がいればきつと何かを変えられると、私は信じています。また将来的には環境にやさしい技術を発明したり、それらを活かしたりできるような仕事にも関わりをもちたいです。今はまだ小さな一歩ですが、それでも前に進もうとする気持ちだけは、絶対に忘れたくはないと思っています。

私にとって地球温暖化は、もはや「問題」ではなく、「課題」になりました。つまり、それをどうやって乗り越えていくか、私たち一人ひとりが考え、実行していかなければならないテーマです。祖父母の暮らす沖縄の海が、また以前のように美しい姿を取り戻せる日が来るよう、これからも私に出来ることを探し、行動し続けていこうと思っています。

■奨励賞（中学生の部）

僕の海

岩崎 有冴

僕は海で泳ぐ事が大好きです。僕が小さい頃からよく「大森ふるさとの浜辺公園」に泳ぎに行きました。透き通った海で、釣り場には小魚がたくさんいる程きれいでした。潮干狩も春に楽しむ事ができます。なので、様々な人がたくさんいて賑やかだったことを今でも覚えています。しかし、今地球は大きな問題を抱えています。それは、世界中で二酸化炭素が増加して温暖化が進んでいることです。AIの計算によると今世紀末までに海面が一メートル上昇すると言われています。一メートル上昇すると日本の砂浜の九割以上が失われ飲料水の確保がより困難になるなどの影響が予想されます。また、魚が減少し食物連鎖によって生態系に大きなダメージを与えます。浜辺公園も潮干狩りや釣りができなくなると寂しくなると思いました。二酸化炭素の排出を抑える事が最優先事項だと思います。

家のゴミの分別に取り組んでみました。ペットボトルのキャップをとってビニールを外すのは地味に難しくリサイクルできる特別なボックスに捨てないといけません。この手間を考えると国民全員がリサイクルを行うことはとても大変だと思いました。ペットボトル以外にも、モバイルバッテリーやガスボンベもあります。砂浜に、ペットボトルやビンなどのゴミがたくさん落ちていている理由がなんとなく分かりました。海以外にも森や山にゴミが捨てられることがあります。ゴミの分別以外にも他の人が落としたゴミを拾って捨てることも大切だと思いました。夏休みの時間を使ってゴミ拾いをしてみました。すると、リサイクルが大変なペットボトルもありまし

た。しかし、ゴミ拾いをしていた時に二十代の男性がたばこの吸い殻を道路に捨てていて僕は悲しい思いを感じたと同時に、いつもゴミを拾って地球の環境を守ってくれている清掃員さんの努力の凄さを感じました。

次に、僕は水と電気を大切にしていこうと思いました。手を石鹸で洗っている時も水を止めるようにしました。ほかにも、使っていない部屋の電気を消したりエアコンなどの必要最低限の電気機器しか使わないようにしたりしました。実際に、節水・節電をしても困る事は無かったです。もっと早くエコについて考えておけば良かったと後悔しました。両親にもエコについて説明して家族全体で環境に優しい生活をできるようにになりました。二学期に後期の委員決めがあります。そして僕は美化委員会に入りたいです。なぜなら、エコの話を家族だけでなく学校全体に広めたいからです。そして学校から国、世界へと環境に優しい生活を広めたいです。

これからも節水・節電・リサイクルを続けて一生海で遊べるようにしていきたいです。

■奨励賞（中学生の部）

洗足流れと生物多様性

伊東 穂香

私の家の近くには洗足流れという小さな川が流れています。ですが、この川は今、「地球温暖化による生物多様性への影響」という問題に直面しています。

まず、地球温暖化の影響についてです。気温が上がると水温も上がります。人にとっては些細な問題かもしれませんが、生き物たちにとっては大きく環境が変わってしまい、生きづらくなってしまいます。また、豪雨や少雨などの異常気象で水量が不安定になります。洗足流れのような幅の狭い川は、異常気象による影響が大きいのです。

次に、生物多様性の減少についてです。洗足流れには、ザリガニやツチガエル、アジサイ、ハナシヨウブなど、様々な生物が共存しています。ですが、最近ではザリガニやツチガエルなどの動物を見なくなりました。考えられる理由は二つです。

一つ目は、豪雨によって流れてしまっている可能性です。幅の狭い川に雨が降り注いで、流れが強くなったことで、生物が呑川まで流れていってしまっているかもしれません。二つ目は、地球温暖化によって水温が高くなりすぎた可能性です。水温が高くなることによって、冷たい水を好む生物にとって住みにくくなってしまいます。調べてみると、特にツチガエルの卵やオタマジャクシは温度の変化に弱いため、いなくなってしまうた可能性が高いのではないのでしょうか。本当の理由は分かりませんが、この二つが関係しているかもしれません。

私は、このまま地球温暖化が進んでしまうと、身近にある小さな

自然を失ってしまうことになると考えました。そこで、大切なことは小さな自然だからこそ守らなければならないと思います。なぜなら、小さな自然も守れないなら、これから直面する大きな自然の問題にも立ち向かえないと考えたからです。

では、どうすればまた豊かな自然を取り戻すことができるのでしょうか。それは、私達一人一人が地球温暖化への関心を高めると共に、小さなことから地球温暖化対策をすることです。電気を無駄遣いしないようにしたり、ゴミを減らしたりなど他にももっとできることはたくさんあります。小さなことを積み重ねていくことで、救える命が一つでもあると良いと思います。

■奨励賞（中学生の部）

エコ未来会議から始まる、大田区の新しい物語

大島 玄吾

大田区は東京湾に面し、羽田空港や工業地帯がある一方で、多摩川や洗足池など、自然も豊かだ。そのため、多様性に満ちたまちだと感じている。このまちで暮らす中で、私は「空気」「水」「緑」に関する環境問題に強い関心を持つようになった。

まずは空気の問題に関してだ。大田区では、光化学スモッグ注意報が出ることもある。私は実際に、図書館の入り口に注意報発令中と書かれた札が出ているのを見た。主な原因は、車や工場から出る窒素酸化物や揮発性有機化合物で、湾岸の工業地帯や羽田空港、首都高速などが大きな排出源となっている。晴れて風の弱い日には、こうした物質が空にたまりやすく、健康への悪影響も心配である。

次に水の問題だ。昔は呑川の汚れがひどかったと聞くが、今は少しずつ改善され、環境基準を満たす川も増加している。それでも、洗足池や歩道にレジ袋やゴミが残っていることが今でもよくある。こうしたゴミが川に流れ込み、最終的に東京湾の環境にも影響を与える。一人ひとりの行動が海の未来にもつながっていることを忘れてはならない。

また、緑の減少も深刻な問題だ。住宅地や商業施設の開発が進む中で、公園や空き地が減り、街路樹が切られた場所もある。日陰が少なくなり、暑さを感じやすくなった。緑の減少はヒートアイランド現象や生き物のすみかの消失など、都市全体に悪影響を与えている。

こうした問題に対し、私は「おおたエコ未来会議」という取り組みを提案したい。これは、大人だけでなく子供も参加できる会議で

家庭や学校、地域での環境への取り組みを発表し合い、意見を交換する場である。光化学スモッグの対策、緑化活動など、大田区に取り組んでほしいことをテーマにし、会議でまとめた意見を「環境提言」として区に提出し、政策に反映してもらおう。

私自身が今後取り組みたいことは、家庭で出た使用済み油をボトルに入れ、スーパーの回収ボックスに持っていくことだ。日本航空が行うプロジェクトの活動に協力したい。この方法を地域でも広めたい。学校や多くの店で、使い終わった油を回収できる仕組みを整えたい。学校や多くの店で、使い終わった油を回収できる仕組みを整えたい。こうした行動が、循環型社会につながると信じている。

さらに、緑を増やすために、学校や地域に花壇や植樹スペースを設け、当番が交代で植物の世話をすることも良い。育てた植物を文化祭で紹介し、地域の人に見てもらえば、自然と地域住民同士つながりが広がる。

環境問題は私達の暮らしと深く関わっている。未来を生きる私達が課題に向き合い、行動する責任がある。大田区が若い世代の声も受け止め、環境と共に生きるまちづくりを進めていくことを願う。小さな提案でも仲間と一緒に行動すれば、まちを動かす原動力となる。私はこれからも学び、考え、行動し、大田区と地球の未来に貢献したい。

■奨励賞（中学生の部）

ゴキブリから私たちが学べること

北村 葵唯

「ゴキブリ」という単語を聞いてあなたはどう思いますか。ほとんどの人が、口をそろえてきもいと言うと思います。実際、私もゴキブリはきらいでいいイメージはありませんでした。

しかし、地球環境の話になるとゴキブリは私たちよりも地球に対して必要な存在であると言えるのです。そこで、私は今回ゴキブリから私たちが学ぶべきことをテーマにして書くことにしました。

ゴキブリは、環境面や人間の生活においてとても大切な存在です。例えば、私たちが普段お世話になっている薬の開発などの実験で使われていたりします。

自然界でのゴキブリの役割は主に「分解者」です。雑食性のため落ち葉や朽ち木、動物のフンなどを食べてそれを土に還しています。そのため、分解者がいなくなると森は、落ち葉や朽ち木だらけになり、新しい植物が成長しにくくなってしまいます。

また、ゴキブリが他の生物の食料にもなっているので、ゴキブリが絶滅するとその他の生物の生態系にも害が及ぶことになってしまいます。このように、ゴキブリは私たち人間よりもエコな生活をしている地球に優しい生物です。

これらのことから私たちがゴキブリに学べることは二つあると考えました。

一つ目は、循環の大切さだと思いました。ゴキブリは、先ほど紹介した通り自然界では分解者の役割を担っています。そのため、動物のフンなどのいわゆるゴミを再利用できるようにしています。そこから私たちが学べることは、ゴミを出すだけでなく循環させる

大切さだと思っています。ゴミを出して何もせずいたらいつか限界が来ると思います。そのため、その点は私たちが学ばなければいけないことだと思いました。私たちには、分別をして再利用することで、ゴキブリと同じくらい環境に優しくすることができると思います。少しずつでも分別をする習慣をつけておかないと将来急に来月からゴミ捨て厳しくなりますなどの変化に対応することができないと考えました。

二つ目は、多様性と環境への適応の大切さだと思います。ゴキブリは様々な環境への適応能力がとても高く、都市や森などの異なる環境でも生活することができます。このことから私たちが学ぶべき点は、地球温暖化などの環境の変化に適応し、対策をしていくことだと思います。何事にもまずは、その環境になれないと対策などはできないと考えたからです。

また、生物多様性のように私たちも古い考えや固定概念にとらわれずに、多種多様な考えや立場を尊重し合うことで環境問題に対処できるようになっていくと考えました。

このことから、私たちは資源を循環させる大切さと環境変化に対応する姿勢をゴキブリから学ぶことができます。

■奨励賞（中学生の部）

寄生虫

題目 ふうり

「寄生虫」と聞くと、どんなイメージを持つだろうか。一般的には悪いイメージだろう。私もそうだった。小学生の頃、食卓で出された生魚に潜んでいたアニサキスの、白くてニルニルとした姿が忘れられない。

ところが最近になって、寄生虫の営みが生態系のバランスにおいて良い影響を与えているというテレビ番組を見た。寄生虫は様々な種類がいて、一説によると既知種の半分を占めるとのことだ。寄生された動物のことを宿主と呼ぶのだが、寄生することによって、結果的に宿主が死んでしまうことは少なくない。しかし、その種に寄生するものがいなかったら、その種のみが増えすぎてしまう可能性があるため、寄生虫には個体数をちょうど良く保つ、という役割があるのだ。また、水中で生きられないカマキリなどに寄生し、操作して、自分達のために入水させる寄生虫もいる。入水させられた宿主は、魚たちにとって暮らしを支える大事な食糧源になっているのだそうだ。魚の餌の六割が、入水させられた宿主である川もある。その場合、寄生虫が魚を養っているとも言えないだろうか。当たり前だが寄生虫だって自然界の一部なのだから、なくてはならない存在で、彼らが消えると生態系は崩れてしまうし、生物多様性は失われるのだ。

そこで、寄生虫について調べてみた。すると、実は寄生虫は生態系のバランスをとるだけでなく、近年の環境破壊や気候変動を調査するうえで、とても役立つ存在だということが分かってきた。ここですべて分かってきた面白い話が、環境指標として寄生虫が役立つ可能性

だ。実際にそうして研究された例がある。カタツムリに寄生する、吸虫という虫がいる。吸虫は、生息する水質や宿主の状態に敏感なので、吸虫の種類や数を調べることで、水質汚染や農薬の影響をある程度知ることができるというものだ。このように、寄生虫は環境のセンサーとなる。こういった「生きた指標」というのは、科学的な分析よりも、低コストで広範囲、長期的に環境の変化を追えるので、重宝できると思う。

以上のことから、寄生虫をただの害虫と思わず、自然界を読み取るセンサーや自然環境の一部として、正しく理解するべきだと感じた。寄生虫に限らず、食わず嫌いしているような生物にも必ず役割や面白みがあるはずで、印象で語ることなく、深く知ろうとする姿勢を持つことが、地球環境を守る第一歩につながるのだ。これからも何事にも好奇心を持って生きていきたいと思う。

■奨励賞（中学生の部）

人感センサーによるエネルギー節約と星夜の復活

志村 とわ

近年、都会の夜空から星の輝きが失われつつある。光害や、大気汚染で夜空が遮られるからだ。光害に関しては星が見えにくくなるだけでなく、動植物への影響や、エネルギーの無駄など、多くの問題点がある。SDGsや環境問題でも取り上げられない人工的な問題である光害だが、早く解決しなければならぬ問題の一つなのだ。

そこで私は街灯に人感センサーを設置することを提案する。ビルや家の明かりも改善案を考えたが、人それぞれ理由があるだろうから対策が難しい。しかし、今回の提案ならば、個人に直接関係しないため実現する可能性が高いと考えた。これが提案をした所以だ。

ここからは、提案について詳しく説明する。まず街灯についてだが、今回ガス灯は省こうと思う。調べてみて大田区にガス灯がなさそうだったことと、ガス灯の仕組み的に、人感センサーは使えないと考えたからだ。また、道路照明灯は交通安全上必要だと思っただけ、これも省くこととする。だからこの提案は、「街路灯」と「防犯灯」が主になる。

暗くなった後、「明らかに人が通っていないよなー」みたいな所も街路灯の電気がついていて勿体ないということを防ぐために、人通りの少なそうな道の街路灯にはつけるべきだ。人通りが多い道の二〇時〜二三時くらいは人感センサーをオフに、深夜から朝方までは人感センサーをオンにすると良いと考えた。そうすることで、出かける人が少ない時間帯を人感センサーによって無駄なところの電気を消し、エネルギーを節約することができるからだ。

これらは、防犯灯も同じ条件ですると良いと思う。防犯灯は犯罪の抑制や発見のためのものだから、人感センサーはもしかしたら利用できるかもしれない。人感センサー付きの街灯の電気がついていたら、それはそこに人がいるということ。それに気づければ犯罪にまきこまれることも減るのではないか。実際に減らすことができるのかはわからない。だが、問題はそこではない。エネルギーを節約しながら、今まで通り犯罪の抑制ができるというのだから。

この提案が実現できるかできないかは一旦置いておいて、こう思っている人がいるということを知ってほしい。加えて、これをお店の看板などにも適応することで、よりエネルギーの無駄を減らせると思う。そして、ここ大田区で、身近な場所で、多くの人が星を見られるようになることを私は願っている。

■奨励賞（中学生の部）

貝殻が教えてくれた大気汚染のこと

吉田 好那

今回、私は大気汚染について考えることにした。理由は、今年の夏に大田区と姉妹都市を結んでいる街を訪れ、そこで大気汚染対策としてどのような取り組みが行われているか教えてもらったからだ。たとえば、車の使用を減らして公共交通機関を利用するよう呼びかけたり、ある大学では、学生専用の無料レンタル自転車のサービスを実施していたりする。

こうした活動を始めたきっかけは、「貝殻」だったという。なぜ「貝殻」がきっかけになったのか。その人はこう話してくれた。

「貝殻は、海の中にある『酸』によって色が抜けてしまう。これはサンゴにも同じことが言える。海の酸は、酸性雨が多くなり、その水が海に流れ込むことで強くなるんだ。」その結果、サンゴや貝殻が白く変色し、色とりどりで美しかった海がどんどん白くなってしまふ。それは海の中の生き物たちの環境を悪くするだけでなく、私たち人間が見る海の景色までも変えてしまうのだ。

これ以上悪化させないためには、先ほど紹介した二つの対策以外に、どんな方法があるのだろうか。まずは、今の状況を整理してみたい。海の中の酸を増やす原因となる酸性雨は、自動車や発電所から排出される窒素酸化物、火力発電所や工場から出る二酸化硫黄によつて引き起こされる。これらの物質は酸性雨を増やすだけでなく、人間の健康にも悪影響を与える。たとえば、ぜんそくや喉の痛みなどの症状を引き起こす可能性がある。

では、こうした有害な物質をなるべく排出しないようにするには、どうすればよいか。私はインターネットを使って調べてみた。

調べてみると、まず一番大切なのは「エネルギーの使い方を変えること」だと分かった。たとえば、電気をつくるために火力発電ではなく、太陽光や風力といった自然エネルギーを使えば、二酸化硫黄などの有害な物質を出さずにすむ。また、日常生活の中でも、無駄な電気を消す、冷房の温度を一度高く設定する、省エネ家電を選ぶなど、移動手段では、徒歩や自転車で移動する、エコドライブを実践するなど、その他のことでは、植林活動に参加する、地産地消を心がける、環境に配慮した商品を選ぶなどすぐにできることはたくさんある。こうした小さな工夫が積み重なれば、結果として空気をきれいにすることにつながる。

今回、大気汚染について考え、調べていく中で、自分にもできることがたくさんあると気づいた。そして、美しい海の景色を守るために、自分にできることを考えて行動していきたい。

■奨励賞（中学生の部）

取り戻せ！日本の多摩川

植松 拓海

小学生の時、多摩川でガサガサをするのが父と僕の楽しみでした。ガサガサというのは、タモ網を使って水辺の生き物を捕まえる遊びです。その日も、いつものようにタモ網で雑草の根元を探っていると、網に一匹の小さな魚が入りました。青紫色の体に黒っぽいしま模様のある、初めて見る魚でした。生き物に詳しい父がブルーギルだと教えてくれました。

ブルーギルは、一九六〇年頃に食用魚として日本に持ち込まれた魚だそうです。今では、生態系や農林水産業に被害を及ぼす恐れがある、特定外来生物に指定されています。僕は、外来種の多さから多摩川が「タマゾン川」と呼ばれていることは知っていましたが、それを身近に感じたのは、この時が初めてでした。多摩川はなぜ、外来種がこれほど多く生息する川になってしまったのだろうかという疑問が湧いてきました。

多摩川の外来種は、二十年ほど前から増え始め、現在は二百種類以上の外来種が潜んでいるとも言われています。こうなってしまう原因は、主に二つあります。原因の一つ目は、外来種の違法放流。二つ目は、水温上昇です。

原因の一つ目である違法放流は、ペットの外来種を飼い続けられなくなってしまうた人達が安易な気持ちで生き物を川に捨てたことが問題になりました。その結果、多摩川に二百種類以上の外来種が住み着いてしまうということになりました。しかし、違法放流だけでは、こんなにも多くの外来種が住み着くことは難しかった

はずです。もう一つの原因が重なったことで、多摩川は「タマゾン川」になってしまったのです。

原因の二つ目である水温上昇には、僕達が家から出す排水も大きく関わっています。僕は、毎日お風呂に入り、大量のお湯を使います。そのお湯を温かいまま流してしまうと、下水処理場から放流される排水の温度も高くなってしまいます。すると、常に排水が流れ込む多摩川の水温は、冬でも下がりにくくなります。その結果、高い水温を好み、本来日本の川では越冬できないはずの外来種が繁殖し、低い水温を好む日本固有の生物が住みにくい川になってしまったのです。

ガサガサでブルーギルを捕まえたあの日、僕は多摩川の問題について、何も知りませんでした。お風呂のお湯も、何も考えずにそのまま流していました。僕には、まだまだ知らないことがたくさんあります。この作文を通して、知らないと守れないものがあると感じました。僕が、お風呂のお湯を冷ましてから流すことによつて、川の水温への影響を減らすことができます。一人でも、すぐに始められる対策があります。しかし、多くの人の協力がなければ、効果を得ることはできません。僕は、自分ができる対策を実践しながら、周囲の人にこの事実を伝えていきたいです。

■奨励賞（中学生の部）

地球温暖化

沖 優衣奈

地球温暖化という言葉は、私がものごころつく前からすでにありました。その為、「いつ知ったのか」と聞かれても、はっきりとは思い出せません。けれど、両親は「子供の頃はここまで暑くなかった」と言うし、ここ最近の夏の暑さを体で感じるたびに、「これは明らかに異常だし、もしかすると地球温暖化の影響がどんどん高まっているのかもしれない」と思うようになりました。

毎年のように「今年の夏は観測史上最も暑い」とニュースで聞きます。クーラーを一日中つけて過ごすのも当たり前となり、積極的に外出を控えるようになりました。酷暑や豪雨といった異常気象が普通になってしまうと、外に出ようとすることが異常になってしまいかもしれません。これが、私が地球温暖化に感じたこわさです。

そんな中でも自分にできることがないか考えました。今家ではエコバッグを使っています。レジ袋をもらわないだけでも、ゴミが減るし、少しでも環境に優しい気がします。また、外箱のない再生紙のティッシュなど、できるだけ資源を大切にしている商品を選ぶようにしています。こういった使うものや買うものを意識してみるのには自分にできる地球にやさしい行動かなと思いました。

正直に言うと、学校でSDGsについて習ったのに、問題は理解しても、解決策についてはあまり覚えていません。でも、あらためて「自分にできることって何だろう。」と考えてみると、難しいことをいきなりやるのではなく、まずは「できそうなことからやってみる」ことが大切だと思いました。

私は、未来の地球が、今よりは過ごしやすい環境であってほしいと願っています。そのために、少しずつでも、自分にできること、できそうなことを増やしていければいいと思います。地球温暖化は、直接目には見えにくい問題だけれど、確実にわたしたちの生活に関わってきます。だからこそ、まずは意識してみることが大切なのだと感じました。これからも、もう少し地球のことを考えてみる機会をもって、過ごしやすい環境となるように自分ができることをやっていきたいです。小さいことでも一人ひとりの意識が、きっと今よりよい環境に変えていくのだろうと信じたいです。

■奨励賞（中学生の部）

リサイクルをしている

伊藤 沙穂子

生徒会では今、リサイクル活動について話し合いをしています。具体的にいうと、ペットボトルのキャップとコンタクトレンズのケースのリサイクルです。

日本の平均気温も上がり、地球温暖化を実感するようになりました。地球温暖化の主な原因は、温室効果ガスの増加です。即ち二酸化炭素の増加です。二酸化炭素は私達生物の呼吸の他に、エネルギーの転換や、車、ごみの燃焼でも発生しています。特にプラスチックは紙より燃焼の際の二酸化炭素の排出量が多く、また、海洋汚染にも関わっていました。

プラスチックのごみを減らすため、私達ができる事はリサイクルだと思います。意見交流会の時に初めて知りましたが、大田区のほとんどの中学校はボランティア活動としてリサイクルを行っています。コンタクトレンズケースやペットボトルのキャップを回収し、業者の方に送っているらしいです。私達石中の生徒会もリサイクルをしたいと思いますし、使わなくなったペンのリサイクルなどもありました。早速、先生に相談してみると、校長先生がリサイクルボックスの注文をしてくださいました。しかし、中学校だけでは数が集まらないのではないかと課題がわかりました。もし、できるのなら、学校付近の家や小学校にも回収にいきたいと思いました。中学校を越え、もっと広い範囲でリサイクルの活動を行います。リサイクルには、地球温暖化と海洋汚染を防ぐ力と、寄付による支援などで社会に貢献する力があります。

小学生のとき、ペットボトル回収が行われクラスや学年でその数を競い合ったのを覚えています。その活動で得たお金は、外で遊ぶボールなど学校の備品になっていました。リサイクルで環境を守ることができ、私達の生活をより良くできるのは、一石二鳥で嬉しいです。各家庭でリサイクルする事は難しいので、回収してくれる場所を、もっと増やせたら良いなと思いました。

世界で一番リサイクル率が高い国はスロベニアです。詳しくみると、この国では、家庭ごみを五つに分別したり、一人あたりのごみの排出量を年百五十キログラムに抑えたりなどの取り組みを行っています。廃棄ゼロの取り組みは、ベトナムなどの他国にも取り入れられています。他国の良い部分を吸収し、地球全体で、環境問題に取り組みたいです。

私一人が頑張ったところで意味がなさそうに感じますが、長い目で見ると、とても大切なことです。未来のために、私ができることを探して、活動していきます。

■奨励賞（中学生の部）

■地球さんご賞本部奨励賞

道端のビニール袋

中山 楓花

見上げると、白い物体が空を舞っていた。

それは、太陽の光を反射して、きらきらと光っていた。一瞬、綺麗だとさえ思った。

しかし、よく見てみると、それは、誰かが捨てたビニール袋だと気づいた。

小学生のとき、授業で死んだクジラの体内から大量のビニール袋が見つかったという映像を見た。そのときは「可哀想だな。」と思うだけだった。ビニール袋をポイ捨てしたことはないし、私にはまるで関係がない。どこかの誰かの責任であって、私が何かしなければならぬことではない。そう思って、ずっと忘れていた。

ある日、近くで行われているお祭りに行った。屋台の一つの焼きそば屋では、商品がビニール袋に入れられて提供される。そのため道端には、ビニール袋やパックを捨てるゴミ箱が設置されていた。食べ終わった私は、ゴミ箱にそれらを捨てた。

そのとき、空を舞っている白い物体を見た。誰かが捨てたビニール袋だった。「何でポイ捨てなんかするんだろう。」と嫌な気分になった。きちんと専用のゴミ箱があるのに、どうして道端に捨ててしまふのだろう。けれども、私はそれを取りに行かなかった。「私が捨てたわけじゃないんだから、私が拾う必要はない」と思っていた。ただなんとなく気になる気持ちもあった。

宿題で地球環境に関する作文を書くことになって、ふとこのことを思い出した。あれは私が取る必要はないよね、と改めて思ったとき、昔見たクジラの映像が頭をよぎった。小学生の私は「自分はポ

イ捨てしていないから関係ない」と思っていた。しかし、ポイ捨てをすることと、捨てられたビニール袋を無視することは、結果的に海の生き物に行っていることは同じなのではないだろうか。

そう気づいた瞬間、自分の行動が恐ろしく思えてきた。あのとき私が見逃したビニール袋が、いつか海に出て、漂っているところを生き物に食べられてしまうかもしれない。もしかしたら、そのせいでその生き物は死んでしまうかもしれない。考えると怖くなった。

死んだクジラからは、およそ八十枚ものビニール袋が見つかったという。もしそのうちの一枚が、昔の私が見逃したビニール袋だったら。最終的にその一枚が、クジラにとどめを刺してしまったのだとしたら……。

私の何気ない行動が、知らないところで、生き物の命を奪っているのかもしれない。

ある日公園を歩いていたとき、空を舞っている白い物体を見つけた。私はそれをつかみ、自分のバッグにしまった。

生き物たちは、静かに、でも確実に苦しんでいる。その声を聞くことはできなくても、それに気づいて、少しでも助けたい。

バッグの中でくしゃくしゃと音を立てているのは、命を奪う可能性を秘めた凶器なのだ。

■奨励賞（中学生の部）

私が見た海

福山 蒼依

私の祖母は漁師をしている。私は昔から祖母つ子でよく漁港にいらっていた。中学生になってから会いに行く機会は減ったが、電話をしたり、美味しい魚を宅配したりしてくれた。ある日の電話で、祖母が「最近魚があまり取れない」と言った。少し元気がなさそうで心配だった。

去年の冬、祖母の地元へ帰省し、漁港に足を運んだ。港のあちこちに少しだがゴミが落ちていた。釣りスポットの灯台の方にもあった。今思えば、昔から私は祖母と一緒にゴミを拾っては家に持ち帰っていた。あの頃は深く考えずにやっていたが、祖母は「海にゴミが落ちたらどうなるか」を意識していたのかもしれない。

年々深刻さを増している海洋プラスチックゴミ。誰かが捨てたゴミが原因で、環境や生き物、そして人間まで被害が出ている。海の生き物がプラスチックを誤って飲み込み、窒息したり内臓を傷つけたり、栄養が取れなくなったりする。また、漁網やロープに絡まり、身動きが取れなくなったり、怪我をしたりする。こういった影響によって漁獲量が減り、漁具への絡まりによる作業への妨げ、水産物の汚染なども起きている。

地球温暖化も海や魚に大きな影響を与えている。海水温上昇は、海の生態系を壊し、気候変動や漁業にも深刻な問題を引き起こしている。サンゴの白化（死滅）、海面上昇、台風の大規模化、漁獲量の減少などがその例だ。

このまま何もしなければ、いつか日本の誇る食文化「寿司」が手軽に食べられなくなるかもしれない。いや、食べられなくなる日が

くるかもしれない。美しい海も見られなくなり、魚よりゴミの方が多し、そんな光景が現実になるかもしれない。何も対策しないと「いつか」が「今」になる。海洋プラスチックゴミ問題も地球温暖化もどれも人間の活動や行動が原因で起きたことである。その被害を受けるのも人間だ。

私は一度現地を見てほしいと思う。ニュースや新聞で見ているだけでなく、実際に被害が起きている場所に行き、そこに暮らす人たちの声に耳を傾け、自分の行動を振り返ってみてほしい。そして、ほんの少しでもいいから、海や環境を大切にすることを始めてほしい。



【作品選考協力】

一次選考…文芸活動に携わるボランティアの方々

二次選考…国語に関わる教育関係者

最終選考…熊井 真次（国立大学法人東京科学大学名誉教授／物質理工学院特任教授）

長井 那智子（NPO法人馬込文士村継承会理事／エッセイスト、翻訳家）

おおた地球さんご賞実行委員

オブザーバー…森 敏彦（一般社団法人水のもり文化プロジェクト代表理事）

【アート作品協力】

大田区生産活動支援施設連絡会（おおむすび連絡会）

区内障がい者施設の利用者の工賃向上・社会参加を促進する取組を進めています。当作品集の挿絵等については、志茂田福祉センター・大森東福祉園・とちの実作業所の方々にご協力をいただきました。

平林 優（志茂田福祉センター）、富山 正美（大森東福祉園）、宮内 泉（とちの実作業所）、

内海 正（とちの実作業所）、東本 京子（とちの実作業所）

大田区社会教育関係団体の方々

大田区社会教育関係団体は、学習、文化、スポーツ等の活動（社会教育に関する事業）を自主的に運営し、地域における学び合いを進めている団体です。当作品集の挿絵等について、日頃から文化センター等において、油絵、鉛筆画、水彩画、造形活動等に取り組んでいる方々にご協力をいただきました。

石蔵 邦彦（アート美原）、黒田 実（アート美原）、日比野 艶華（彩美会）、村田 雪江（彩美会）

森田 文子（アートクラブ）、松原 秀章（昭和糀谷の歴史・文化の会）、若菜 淑子（絵手紙みどり会）

【「後援」】

公益財団法人大田区文化振興協会

公益財団法人伊東奨學會

【「協賛」】

株式会社荏原製作所

株式会社ヒダロジスティックス

ALSO K株式会社

【「おた地球さん」賞実行委員会】

委員長 菅野 哲郎（大田区立大森第六中学校 校長）

副委員長 小山 文大（大森海苔のふるさと館 事務局長）

監事 立山 睦正（公益財団法人大田区文化振興協会 事務局長）

松橋 尚子（大田区立嶺町小学校 校長）

委員 澁谷 咲月（株式会社荏原製作所 拠点管理統括部 総務部 社会貢献課）

飛弾 昌美（株式会社ヒダロジスティックス 代表取締役社長）

佐藤 卓也（ALSO K株式会社 城南支社 営業部 部長）

森 敏彦（一般社団法人水のもり文化プロジェクト代表理事）

山本 成俊（一般社団法人水のもり文化プロジェクト補助スタッフ）

鈴木 孝司（大田区教育委員会事務局教育総務部 教育総務課長）

東山 良彦（うのき水辺の楽校協議会 顧問）

事務局 一般社団法人水のもり文化プロジェクト、大田区教育委員会事務局教育総務部教育総務課教育地域力推進担当



画：若菜 淑子（絵手紙みどり会）

主催：一般社団法人水のもり文化プロジェクト
共催：大田区教育委員会
作成：令和8年2月8日
印刷：株式会社ジャンボ
大田区萩中3-28-18 TEL03-3745-5911

